天空の都・チベットを訪ねて　後編

長嶺胃腸科内科外科医院
長嶺　信夫

外貨獲得の観光資源・ポタラ宮

ラサではまず、ポタラ宮の観光である（写真3）。ガイドがパスポートと入域許可証を提示し、入場券を購入、持ち物検査をうけ、石でできた高い階段を登る。体重オーバーの上、3,650メートルの高地での階段はさすがに息がきれた。宮殿入口に江沢民が揮毫した扁額がかかげてあった。読んでみると「維護民族団結宏揚民族文化」と書いてある。中国は文化大革命が始まる4年前までに、チベットの約6,000におよぶ仏教寺院を破壊したといわれている。そして今も、チベット仏教や民族を弾圧している。いかにも場違いの額であった。

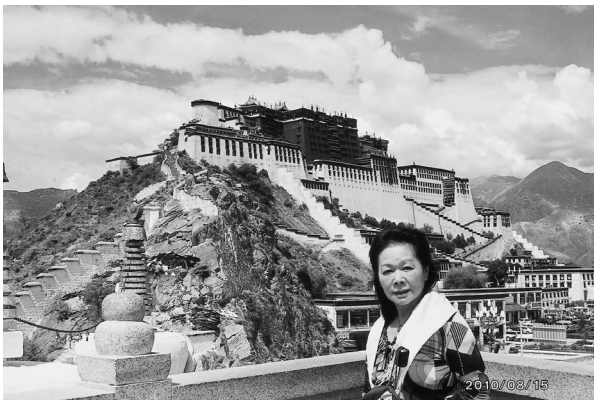

写真3.　マルポ・リの丘に建つポタラ宮。外貨獲得の観光資源である。

ダライ・ラマが政務をおこなった場所、宗教儀式の場所など約1時間の案内であった。宗教儀式の場所には死去した歴代のダライ・ラマの彫像があり、その前に中国語と英語の説明版があった。「ダライ・ラマ」の説明版に「ダライ・ラマの称号は、北京の皇帝から授けられた」と記載されていて、チベット人の女性ガイドもそのように説明していた。私が「ダライはもともとモンゴル語で、ダライの称号はモンゴルの皇帝から授けられたと聞いている」とガイドに言うと「本当はそうかもしれません、政治的なことですから」と暗い表情で答えていた。ガイドにもそのように説明するように強制しているのであろう。

ガイドに「チベットには外国から仏教やダライ・ラマに関する正確な情報が入っていない」と言うと、「家捜し（家宅捜索）がある」と言葉少なに話していた。西寧の駅で会ったチベット人男性ガイドも「中国人（漢民族）のガイドはうその説明をしている」と小声で話していたが、それは事実だと確信した。現在チベット人ガイドは全体の僅か5％しかいないとのことであった。事情を知らない人達は史実に反した説明を真実と思うだろう。

ノルブリンカ離宮、ジョカンをまわる

ノルブリンカ離宮ではかってダライ・ラマ14世が使用した謁見室、ベッドルーム、シャワールームなどが公開されていた。庭園は綺麗に整備され、色とりどりのダリアの花が咲きみだれていた。チベットでは当初ダリアの花と仏教のハスの花とが混同され、ダリアの花が沢山植えられたという（写真4）。

写真4.　ダライ・ラマ法王14世が夏を過ごしたノルブリンカ離宮。

また、離宮の庭園は休日には多くの人で賑わい、丁度私達が観光で訪れた時はお祭りの季節だったのでチベットの伝統的な踊りである「仮面舞踊」が上演されていた。地方からラサを訪れた巡礼者にとっては久しぶりの娯楽なのだろう、多くのチベット人が観賞していた（写真5）。

2008年の暴動の発端となったジョカン（大昭寺）も見学したが、出入口は公安警察で固められ、入場券も公安が切っていた。暴動で寺から排除されたラマ（チベット僧）は2度と寺に

写真5. ノルブリンカ離宮の庭園で上演されていた「仮面舞踊」

入れないようにしているのだろう。現在チベットでは許可なく僧院・尼僧院の開設はできない。僧院にも定員制がしかれ、中国当局の厳重な管理下におかれている。このことは今回チベット人ガイドにも確認することができた。

僧院のなかでは敬虔な巡礼者が灯明に注ぐバターを小皿に入れ、菩薩像や釈迦像の前に列を作り、並んでいた。その横を私達一般観光客がガイドの説明を聞き流しながら通りすぎていく。

ジョカンの周りのお土産品店でにぎわうバルコル（八廓街）では完全武装した武装警察隊が自動小銃を手に隊列を組んで巡回し、要所で公安警察が目を光らせていた。監視カメラも多数設置されているという。その様子を写真撮影したいと思ったが諦めるしかなかった。

敬虔な巡礼者たち

チベット南部のヤムドク湖を訪ねて車を走らせていた時である。道路わきの岩肌に白いペンキで沢山ハシゴのようなものが描いてあった。不思議に思って訊いてみると、「天空から神様が降りてくるハシゴ」との返事であった（写真6）。またポタラ宮近くを歩いていたときである。道路沿いで、中国人がタライやプラスチック製の容器を水槽がわりにし、フナやカエルを売っていた。ふと目をやると、チベット人の巡礼者がそのフナを買っている。二重になったビニール袋に水と魚を入れ、袋を酸素で満たしていた。チベット人は魚を食べない。渡辺一枝さんの「わたしのチベット紀行」の本に書いてあったことをすぐに思い出した。買ったフナを池や川に放すのである。現金収入の少ない貧しい巡礼の人達にとっては大変な出費であろう。生きとし、生けるものに憐れみをいだくこの敬虔な仏教徒の住んでいるチベットに中国の侵略、やりきれない気持になった。

写真6. 天空から神様が降りてくるハシゴ。

バター茶とツァンパ、ヤクの肉を食べる

チベット人ガイドは、昼食と夕食のとき、チベット人が経営するレストランに案内した。大麦で造るチベットの酒・チャンを指で天に弾いて飲み、バター茶やチベット人が主食にしているツァンパやヤクの肉料理をはじめて食べた。ツァンパは高地産の大麦を煎って、それを粉状にしたもので、バター茶で捏ねて食べる。携帯にも便利で、チベット人が遊牧や長期の巡礼をする際ヤクの干肉とともに持参する欠かせない食料である。

私も何時の日かツァンパとヤクの干肉、バター茶をかつぎ、チベット人ガイドとともに、「聖なるカイラス山」の巡礼に行きたいと思った。そしてチベットの純朴なガイド達と星空のもとチャンを飲み交わしたい。ところで、ガイドによると、チベット人は巡礼の途中に亡くなった時、今でも「鳥葬」にすると言っていたが、それだけは勘弁願いたい。

最後に短期間のチベット旅行であったが、幸いにも２人のチベット人ガイドに会うことができた。同時に２人のチベット人ガイドに会う確率は５％×５％、すなわち400分の１である。中国人のガイドでは知ることのできない色々なことを教えてもらい、交流できたことに感謝している。チベットの人達の願望が１日も早く達成されることを祈りたい（2010年10月記）。